

コ
ロ
ナ
を
く
ぐ
り
抜
け
て

あらすじ

佐竹 真（28）は居酒屋で働いている料理人。オンボロアパートで佐竹 大介（50）と高校生の佐竹 かおり（17）と一緒に住んでいる。大介は足を怪我しており生活保護を受けている。毎日パチンコに通う生活をしている。佐竹の店の常連客には資産家の鈴木 武（40）がいて佐竹の料理の腕をかつている。

ある日、コロナの影響で店は閉店となり佐竹は失業する。学費が払えずかおりは高校中退となる。佐竹はユーバーイーツの仕事を始める。かおりはファミレスで知り合ったユーチューバーの男達に誘われ、コメディの撮影に参加する。

佐竹は仕事で足を挫き、かおりは撮影後男達にレイプされそうになる。

かおりは佐竹と大介に不満をぶちまける。佐竹は仕事で鈴木と出くわし、別の居酒屋の

仕事を紹介される。収入の目途がたった佐竹
はかおりに高校卒業認定試験を受けて、大学
入学試験を受験するよう勧める。

登場人物

佐竹 真 (28) 居酒屋の料理人

佐竹 大介 (50) 真の父親

佐竹 かおり (17) 真の妹

鈴木 武 (40) 居酒屋の常連客

青柳 良太 (28) 真の友人。詐欺師

佐久間 薫 (19) ユーチューバー

杉原 登 (19) ユーチューバー

石原 洋子 (17) かおりの友人

安藤 (34) ユーチューバー、シナリオラ

イター

斎藤 (25) ユーチューバー

石田 (50) 居酒屋の店長

○アパート外観（朝）

線路際に2階建ての老朽化したアパートが建っている。電車が何本も線路を行きかっている。線路の向こうにはタワーマンションが並んでいる。

○同・佐竹の家の前

佐竹と書かれた表札がかかっている。古びた釣り竿が壁に立て掛けてある。蟬の鳴き声がうるさい。

○同・佐竹の家のキッチン

佐竹 大介（50）が椅子に座っている。椅子には杖が立て掛けてある。佐竹 かおり（17）が目玉焼きを焼いている。大介はトーストをかじっている。ふすまが少し開いていて、布団が見える。佐竹 真（28）のいびきが聞こえてくる。

かおり「今日も行くの」

大介「家にいてもやることないからな」

かおり「気楽な生活だね」

大介「ふん。仕事したら保護が受けられなくなる。こっちで稼いだ方が得なんだよ」

大介はパチンコのハンドルを回すしぐ

さをする。かおりは目玉焼きを皿に載せて大介の前に置く。

かおり「クズ」

大介「クズでけっこう。仏壇には参ったか」

かおりはふすまを開ける。棚の上に仏壇があり、笑顔を浮かべた女性の遺影が置いてある。かおりは手を合わせる。

かおり「じゃあ、行ってくる」

大介は目玉焼きの黄身に口をつけて吸っている。

かおり「それ、やめてよ」

大介「この食い方がうめえんだ」

かおり「不潔！」

かおりはドアを開けて出ていく。

○佐竹の家の前

かおりは線路向こうのタワーマンションを見つめる。

○同・居間

佐竹が寝ている。下着姿で布団はかけてない。筋肉質な体、日に焼けた顔。寝ぼけてうーんとうめいている。

○繁華街（夕方）

ネオンの輝く通り。大勢の人々が行きかっている。

○居酒屋「勇氣」外観

勇氣と書かれた赤ちようちんが入口にかかっている。

○同・店内

テーブル席が3つ。カウンタ―から厨房が見える。サラリーマンが2人、カウンタ―で飲んでいる。

○同・厨房

佐竹が焼き鳥を焼いている。金髪の若い女の店員が串に肉を刺している。

サラリーマン「まだなの」

佐竹「少々お待ちを」

佐竹は串に刺さった焼き鳥を火にかける。

佐竹「あーちゃん、すじ出しといって」

女の店員「はい」

女の店員は冷凍庫から肉の塊を出す。

○同・店内

鈴木 武（40）がドアを開けて店に入ってくる。

鈴木「混んでる？」

佐竹「いえ、いつもどうも」

鈴木「ふう。涼しい」

鈴木はカウンターの席に座る。

鈴木「君の作った料理が食べたくてね」

佐竹「ありがとうございます。今日は早いですね」

鈴木「お店の子と約束してる」

佐竹「昨日連れてきた子ですか。うらや

ましいな」

鈴木「さゆりちゃん。今度、一緒についておいで。彼女も喜ぶ」

佐竹「じゃあぜひ。今日は何飲みます？」

鈴木「いつものやつ」

佐竹「あーちゃん、いつものやつ」

女の店員「了解。（佐竹に小声で）毎晩来ますね」

佐竹「彼、不動産投資家。この店の大家さん。仲良くしとくといいよ」

店の奥にテレビがあり、ニュースが流れている。

アナウンサーの声「コロナによる感染が拡大

しています。政府は明日にも首都圏、1
都6県に緊急事態宣言を発令する見込
みです」

鈴木はタバコを吸っている。

鈴木「大丈夫かね」

佐竹「(不安そうに) いやあ……」

鈴木はグラスに入った焼酎を飲み干す。

鈴木「おまかせセット」

佐竹「おまかせいっちゃん！」

女の店員「おまかせいっちゃん！」

鈴木「佐竹君の焼き鳥は最高だね」

佐竹「それほど」

佐竹ははにかむ。

○高校外観(夕方)

○同・教室

かおりと石原 洋子(17)が教室から
出ていこうとしている。

洋子「ねえ、カラオケ行かない？」

かおり「今日はだめ」

洋子「塾？」

かおり「バイトの日」

洋子「そっか。残念。クーニースだよね」

かおり「うん。ななみとさどこ誘ったら」

洋子「そうだね。だけでももうすぐ受験でしょ。

バイトしてて大丈夫？」

かおり「そういう洋子こそ、カラオケなんて」

洋子「私は大学行かないもん」

かおり「就職するの？」

洋子「うん。かおりは私と違って勉強できる

んだからがんばって。志望校決めた？」

かおり「まだ決まってるじゃないけど、法学部にする」

洋子「法学部目指すんだ。弁護士になるんだ

って言ってたもんね。もしかして親も弁

護士？」

かおり「えっ、うん。そう、そうなんだ」

洋子「いいなあ。弁護士の娘なんて。かつこ
いい」

かおり「そんなことないよ」

洋子「なんで弁護士になりたいの」

かおり「悪い奴らをやっつけたいの」

○パチンコ屋・中

大介がタバコを吸いながら、パチンコを
している。玉がいつぱい入った箱が椅子
の後ろに積んである。隣に土方風の若い
男が座っている。

大介「くそ、しけてんなあ」

店員が後ろを通りかかる。

大介「おい、ビール。缶ビール買ってきてく
れ」

店員「はい」

若い男「役立たず」

隣に座っていた若い男がつぶやく。

大介「何か言ったか」

若い男「え？」

大介「おまえ、今役立たずって言ったろ」

若い男「言ってますんよ」

大介「いや、言った」

若い男「こんなるさいところで聞こえる

わけないでしょ。幻聴じゃないの、おっ

さん」

大介「言ったろ、おい」

若い男は席を立て、どこか行ってしま
う。

○ファミリールレストラン内

かおりが料理を運んでいる。佐久間薫

(19)と杉原登(19)が座っている

テーブルに料理を置く。

かおり「お待たせしました」

杉原「ねえさん、かわいいね」

かおりは無視する。

かおり「ごゆっくりどうぞ」

○居酒屋勇気外観(夜中)

赤ちようちは消えている。佐竹が
出てくる。

○街の通り（夜中）

佐竹が歩いてくる。横の路地で怒鳴り声
が聞こえる。佐竹が見ると中年のサラリ
ーマンが倒れていて、10代の少年2人
がポケットから財布を抜き取っている。

佐竹「おい。何してんだ」

佐竹はそちらに歩いていく。

少年「やべっ。行こう」

少年2人は逃げ出す。佐竹はサラリーマ
ンのもとに駆け寄る。

佐竹「大丈夫ですか」

サラリーマンのかけた眼鏡が割れて

おり頭から血が流れている。

佐竹「近くに交番があるんで行きましょう。

歩けますか？」

サラリーマンは立とうとするがふらつ
く。佐竹は肩を貸す。

佐竹「このあたり、夜は物騒だから気を
つけないと」

サラリーマン「すみません。飲みすぎちゃっ
て」

佐竹はサラリーマンに肩を貸して歩い
ていく。

佐竹「さあ。あっちです」

サラリーマン「すみません」

○木造アパート外観

晴れた空。セミが鳴いている。佐竹が
ドアから出てくる。

○木造アパート外

階段下にゴミが積んである。

佐竹「またあいつらか」

佐竹は1階の部屋のドアをノックする。

浅黒い男が出てくる。

男の声「なに？」

佐竹「ゴミ、あそこ。捨てちゃだめでしょ」

男「ごめんなさい」

佐竹「ゴミ出しのルールわかってる？」

男「私、日本語、わかりません」

佐竹「もういい。管理会社に電話しとくから」

男「なんですか？」

佐竹「困っちゃうよな。外人には」

佐竹はドアを乱暴に閉める。男は驚く。

○荒川の河川敷

麦わら帽子をかぶった佐竹が釣りをしている。

○佐竹の家・中

かおりはイヤホンをはめ、机に向かい勉強している。大介はキッチンのテーブルでテレビを見ている。佐竹が入ってくる。手に持ったクーラーボックスを上に掲げる。

佐竹「荒川でコイが連れた」

かおり「え？コイなんているの」

佐竹はクーラーボックスから大きなコイを出す。まな板を出して上に置く。

大介「コイなんてひさびさに見たな」

かおり「大きいね」

佐竹「どう料理する？刺身にしようか」

かおり「私も手伝う」

× × ×

テーブルについて食事している佐竹た

ち。刺身や鯉こくが並んでいる。窓の外

は暗い。

大介「母さんにもあげないと」

佐竹「そうだ。忘れてた」

佐竹は鯉の刺身を小皿に載せて仏壇に供え、手を合わせる。

かおり「いただきます」

かおりは刺身を食べる。

かおり「さつすがプロだね。プロの味」

佐竹「味の違いがわかるんだ」

かおり「誰だっってわかるよ」

大介「うまいな」

かおり「鯉こくなんて初めて食べた」

佐竹「そうだろうね。ファミレスとかじゃ絶

対に出さないからな」

かおり「バカにしたような言い方やめてよ」

佐竹「レトルトばかりだよ」

大介「せつかくのごちそうなんだから喧嘩

はよせ」

3人は黙々と食べる。

○居酒屋勇気外観（夜）

○同・中

青柳 良太（28）が入って来る。

ブランド物のシャツ、ズボン、ネックレスを身に着けている。

佐竹「いらっしやい。……あれ？」

青柳「ん？」

佐竹「俺だよ。まこと。羽振りよさそうだな。

「ここ、どうぞ」

青柳「あつ、思い出した。ミッドファイルダー
やってたっけ」

青柳はカウンター席に座る。佐竹は
おしぼりとお通しを置く。

青柳「サッカーやってる？」

佐竹「もうやってないよ。りょうた、ずいぶ
ん稼いでそうだな。仕事、何やってる
の」

青柳「ネット販売」

佐竹「へえ、輸入品とか？」

青柳「ナンパのノウハウ」

佐竹「そんなの売れるのか。へえ」

青柳「需要はある。佐竹もやってみたら」

佐竹「俺はいいよ。パソコン持ってないし」

青柳「料理人はどう？楽しい？」

佐竹「今は修行中だからね。けど、楽しいよ」

青柳「そりゃよかった。ずっとここで？」

佐竹「自分の店を持ちたいって思うけどまだ
まだ先かな」

青柳「そうだよな。人に使われてるより自分でって思うよな」

佐竹「俺は別に思わんけど」

青柳「そうか……。おまえ、まだ実

家にいるの」

佐竹「うん」

青柳「とうちゃん元気か？ 鳶職人やってたっけ」

佐竹「作業中にケガしてね。今はこればっか」

佐竹はパチンコの玉を打つしぐさをする。

青柳「もしかして生保？」

佐竹「まあね」

青柳「まあ、けがしたんじゃ仕方ないよ。妹もいただろ」

佐竹「今、高校生」

青柳「かわいくなっただらうな」

佐竹「かわいくはない。生意気で。たぶん反抗期だな」

青柳「そっか。会ってみたいな。彼氏はいる

の」

佐竹はテレビを見ている。ニュースが流れている。

アナウンサーの声「増え続ける孤独死問題の特集です。年々一人で孤独死される方が増えていきます。政府は……」

青柳「部活の先輩でしげるさんっていたじゃん」

佐竹「ずっと補欠だった人？」

青柳「孤独死したんだって」

佐竹「え？」

青柳「派遣で仕事がなくなってる」

佐竹「あの人まだ30歳じゃ」

青柳「ずっと引きこもってたらしい」

佐竹「なんかあったのかな。探せば仕事あり

そうだけど」

青柳「不景気だし難しいだろ」

佐竹「暗いニュースが多いなあ」

○居酒屋勇気外観（朝）

佐竹が走って店に入って行く。雨が降っている。

○同・厨房

佐竹は仕込みをしている。店長 石田

(50) が来る。

佐竹「おはようございます」

石田「佐竹君」

佐竹「なんですか」

石田「わかるいんだけどね。今月いっぱい店
閉めることになって」

佐竹「閉める？」

石田「そうだ」

佐竹「自分はどうなるんですか」

石田「正社員以外は全員解雇だ。ほんとすま
ない」

佐竹「クビってこと？」

石田「再開するときは連絡するから」

佐竹「連絡っていつごろですか」

石田「それはまだわからない。ごめんな」

石田は佐竹の肩に手を置いて出ていこうとする。

佐竹「店長は？」

石田「俺か？よその店に移るよ。正社員だから」

佐竹「……」

佐竹は茫然と立っている。

○佐竹の家

佐竹が入って来る。大介がテレビを見ている。テーブルにはビール瓶、グラスも置いてある。

大介「おかえり」

佐竹は椅子に座り、グラスにビールを注ぐ。

大介「どうした。元気ないな」

佐竹「仕事クビになった」

大介は自分のグラスにビールを注ぐ。

大作「まあコロナだしな。そういうこともあるだろ」

佐竹「……」

大作「なにか仕事見つけないと。ユーバーな
んとかなんかいいんじゃないの。稼げそ
うだ」

佐竹「ユーバーイトね。考えてる」

大作「かおりには言ったか？」

佐竹「まだ。俺、明日学校に相談に行つてく
るよ」

大作「俺も担当者に聞いておく」

○高校外観

○同・職員室

ソファに佐竹が先生と向き合って座つ
ている。

先生「なるほど。緊急事態宣言ですからねえ。
お気の毒に」

佐竹「授業料の支払いは待ってもらえません
か」

先生「それはちよつと難しいですね」

佐竹「払えないとどうなります？」

先生「退学になりますな」

佐竹「はあ……」

先生「一つ提案があるんですがね」

佐竹「提案？」

先生「高校卒業認定試験を受けてみては。」

あと半年ほどで卒業ですし」

佐竹「かおりがなんと言うか」

○佐竹の家

かおりが3脚に取り付けられたスマホ

の前に座り、大袈裟な身振りでしゃべっている。

かおり「ちよつと待って。おかしくないです

か。卵焼きはステーキになれない。ステ

ーキはステーキのままなんだよ」

タイムラインにコメントが表示される。

かずや「誰だろ？」

D「わかかんねー」

しぶ「森高千里？」

かおり「ぶー」

えいた「篠原涼子か？」

かおり「あったりー」

えいた「なにかもらえるの」

かおり「3回当たったらラインID教えてあげる」

佐竹と大介はキッチンの椅子に座っている。

佐竹「担当者、なんて言ってた？」

大介「上司に相談してみると」

佐竹「それで？」

大介「この前電話したら、忙しくてまだ対応してないだ」と

佐竹「望み薄いかな」

かおり「じゃあね、みんな。チャオ。また明日」

かおりはスマホに手を振っている。スマホを外す。

佐竹「かおり、悪いけど高校退学してくれないか」

かおり「え？」

佐竹「俺、失業したんだ」

かおり「いきなり退学って」

佐竹「来月の学費が払えない。高校にも相談
に行っただけだね」

かおり「お父さんは仕事は？」

大介「働いたら負けなんだよ」

佐竹「あるいは、お前が働くか」

かおり「月5万以上も無理よ」

大介「女の仕事って色々あるだろ。女性特有
のが」

かおり「なに女の仕事って……。ち

よつとやめてよ」

佐竹「やめなよ。気持ち悪い」

大介「わるい」

佐竹「高校卒業認定試験っていうのがあるそ
うだ。それ受けて」

かおり「学校辞めないといけないの」

佐竹「仕方ないだろ」

かおり「卒業式、出たかった」

○佐竹の家・居間

佐竹が座って電話をかけている。

佐竹「あの、配達員やりたいんですが」

電話の声「公式応募サイトがあるんで、そこに入力してください。URLお伝えしましょうか」

佐竹「少々、お待ちを」

佐竹はかおりの机の上からノートとペンを持ってくる。

佐竹「どうぞ」

電話の声「UBER川口って入力してください。U、B、E、Rです」

佐竹「UBERですね」

電話の声「それと、ワクチンは打ちましたか」

佐竹「いえ」

電話の声「ワクチン接種が条件ですので受けてください。応募者は無料でうけられますんで」

佐竹「わかりました」

佐竹はふすまを開ける。大介がテレビを
見ている。

佐竹「父さんはワクチンは打った？」

大介「いや、俺は打たない」

佐竹「そう。俺は打つしかないな。かおりは
どうしたんだろ」

大介「若い奴は打つことないだろ」

○喫茶店外観

○同・中

かおりと洋子が向き合って座っている。
ケーキとアイスコーヒーがテーブルに
置かれている。

洋子「かおり、学校辞めちゃうんだ」

かおり「うち貧乏だから。私立にしなきゃ
よかった」

洋子「どうするの、大学は」

かおり「考えてる」

洋子「かおり、頭いいんだから活かさないと」

かおり「うん」

洋子「私と違って……ふう。かおり

がいないと寂しくなるね」

かおり「……」

洋子「タイムラインに近況報告上げてね。

絶対見るから」

○道路（夜）

佐竹が自転車を漕いでいる。ユーバーイ
ーツと書かれた黒い箱がくくりつけて
ある。雨が降って来る。佐竹は舌打ちす
る。

佐竹「ついてねえ」

○佐竹のアパート外観（夜）

雨は上がっている。

○佐竹の家

びしょ濡れになった佐竹が入って来る。

佐竹「ただいま」

キッチンのテーブルには大介が座って
いてテレビを見ている。テーブルの上
は紙袋が3つ置いてある。かおりはス
マホに向かい何かしゃべっている。

佐竹「かおり、いつも何やってんの」

かおり「タイムライン、知らないの？」

佐竹「無駄なことを」

かおり「無駄って：：：。ファンも多

いんだからね」

佐竹「稼げるのか」

かおり「そんな目的でしてないもん」

佐竹はタオルで頭などふいている。

佐竹「父さん、また勝ったんだ」

大作「パチが俺の天職だな」

かおり「父親らしいまっとうな仕事ってある

よね」

大作「だから」

かおり「この人なんとかして」

大作「なんだと」

佐竹「親に向かって失礼だぞ」

かおり「こんなの父親じゃない」

大作「養ってもらっててなんだ」

大作は立ち上がりかおりをぶとうとするが
かおりは逃げる。

かおり「養ってるのはお兄ちゃんでしょ」

大作「クソが」

かおり「みんなから馬鹿にされてるよ」

大作「勝手にほざいてろ。ふざけやがって」

佐竹「父さんは怪我してんだ。仕方ないだ

ろ。おまえも無駄なことばかりしてない
で働け、無駄飯食い」

かおり「無駄飯食い？無駄飯食いつて何よ。

よくもそんな……」

かおりは家を出ていく。佐竹は追いか

ようとす。大作は手で制する。

大作「ほっとけ。どうせすぐ戻って来る」

○佐竹の家の前

かおりが出てくる。線路向こうに建つて
いるタワーマンションを見つめる。多く

の窓から色々な色の光が漏れている。

○佐竹の家・中

テレビのニュースが流れている。

アナウンサーの声「情報商材詐欺のニュースです。500人以上から1人10万円騙し取った容疑で青柳良太が逮捕されました」

テレビで手錠をかけられ連行される青柳の姿が写る。不敵な笑みを浮かべている。

佐竹「あれ？良太だ！」

大作「なんだ、知り合いか？」

佐竹「工業高校の同級生」

大作「軽薄そうな男だな。笑ってるし」

佐竹「父さんが鳶職人やってたって知ってたよ」

大作「あ、思い出した。青柳の一軒家作る
とき仕事したわ」

佐竹「それで」

大作「なつかしい。タワマンの建設やってたときだ。あの頃は仕事がたてこんで忙しかった」

佐竹「ほとんど家にいなかったもんね」

大作「(しんみりと) 毎晩飲み歩いてた。あのころは仲間もたくさんいたなあ……。母さんも元気だったし」

佐竹「なんで死んじゃったんだろ。納得いかない」

大作「心臓が悪いつて入院して、見舞いに行った日は元気だったのにな」

佐竹「かおりが医者へのミスに違いない、医療ミスだ、やっつけてやるって騒いでたっけ」

大作「ひどい荒れようだったな」

× × ×
(フラッシュユ)

大作とかおりが何か叫んで抗議している。警備員3人が押しとどめている。

× × ×

佐竹「母さんとはどうやって知り合ったの」
大作「家の改修工事でき。けっこうな豪邸で
暑い日だった。休憩中に麦茶をもってきて
くれて。笑顔が天使のようだった」
佐竹「母さん、昔は天使だったんだね」

○仏壇に飾られた笑顔の母親の写真

○ファミリールレストラン外観（夜）

○同・客席

かおりが座ってスマホをいじっている。
コーヒーが入ったグラスが置いてある。
佐久間と杉原が近くのテーブルにいて
ちらちらと様子を見ている。佐久間がか
おりのテーブルに来る。

佐久間「君、ここの店員でしょ」

かおりは無視している。

佐久間「よかったらあっち来ない？おごる
よ」

かおりは佐久間を見る。

佐久間「お腹すいてない？」

× × ×

かおりは佐久間、杉原と一緒に座っている。ポテトが皿に山盛りに積まれている。

かおりはポテトをつまんでいる。

佐久間「俺たちユーチューバーやってんだ」

杉原「杉原って言います。よろしく」

杉原が手を出す。かおりと握手する。

佐久間「佐竹さんは高校生？」

かおり「もうやめた」

佐久間「じゃあ、フリーター？」

かおり「そんな感じ」

杉原「辞めたってなんかあったの？」

かおり「：：：」

佐久間「よく夜中にここいるからさ。気にな

ってたんだよね」

かおり「ユーチューバーってどういうことや

ってるの」

佐久間「お笑いみたいな。見てみる？」

かおり「うん」

佐久間はおおりにスマホを見せる。かおりは笑う。

かおり「うける。けっこう本格的だね。コメデイ？」

佐久間「そう。コメデイ」

杉原「今度、仲間4人で長めのやつ撮る予定なんだ。参加しない？」

かおり「面白そうだね」

杉原「ギャラも出るし」

かおり「え、ギャラ？ギャラってかつこよくない？」

杉原「といても大した額じゃないけど」

佐久間「出してみる？」

かおり「うん」

佐久間「大歓迎だよ。男ばかりだし紅一点かおり「どこで撮るの」

佐久間「荒川の河川敷。すぐそこだよ。連絡するからさ、ライン教えて」

○パチンコ屋（夜）

大介がパチンコをしている。イラついた様子。玉がなくなる。

大介「くそっ」

大介はパチンコの画面を叩く。

○街の通り（夜）

自転車をこいでいる佐竹。後ろから軽自動車がかかる。車を避けようと自転車を傾けたが木に接触して転ぶ。佐竹は脛を抑える。

佐竹「いってえ」

○佐竹の家（夜）

大介はキッチン椅子に座り、缶ビールを飲んでいる。

大介「うめえなあ」

佐竹が入って来る。足を引きずっている。

大介「おい、足、大丈夫か」

佐竹「ちよつと転んじやってね」

大介「医者には行ったか」

佐竹「そんな金あるかよ」

大介「肉体労働者が俺みたいになったらお終いだぞ。保険証が使えるかもしれん。ケースワーカーに聞いといてやるよ」

佐竹「うん。お願い」

佐竹は居間に行き、タンスの引き出しから湿布を取り、脛に貼っている。

○ファミレス内（夜）

かおりと佐久間、杉原が座っている。

佐久間「はい、これ台本」

佐久間はかおりに台本を渡す。

杉原「セリフ、少ないけど覚えてきてね」

かおり「なんか本格的だね。これ誰が書いたの」

杉原「安藤さん。撮影で会えるよ」

かおり「いっぱい稼いだらどうしようかな」

佐久間「何か欲しいものとかあるの」

かおり「タワマンの広い部屋で一人暮ら

しするんだ」

○佐竹の家の前

麦わら帽子をかぶった佐竹が出てくる。
釣り竿を持って出ていく。

○荒川河川敷（夕方）

かおり、佐久間、杉原、安藤（34）
斎藤（25）がいる。かおりと斎藤の
やり取りを背の高い安藤がビデオカメ
ラで撮影している。近くを釣り竿をかつ
いだ佐竹が通る。立ち止まり撮影を見る。
かおりはカメラに向かって何かしゃべ
っている。かおりと目が合う。

かおり「お兄ちゃん？」

× × ×

すっかり日は落ちている。ビール片手に
輪になっているかおり達。

安藤「おつかれさま。かんぱい」

一同「かんぱい」

佐久間 「(隣のかおりに) どうだった？」

かおり 「楽しかった。また誘って」

安藤 「かおりちゃん、よかったよ。おかげで

再生数上がるよ」

かおりはうなづく。

杉原 「この人が安藤さん。俺たちの台本を書
いてる」

かおり 「すごいですね。台本書けるなんて」

安藤 「いや、大したもんじゃない。シナリ

オライターやってます。よろしく」

斎藤がかおりのそばに来る。

斎藤 「俺は役者。安藤さんの知り合い」

かおり 「プロの役者さん？演技うまいと思っ
た」

斎藤 「どうも。ほめてくれてありがと」

安藤 「アップしたら知らせるよ」

杉原 「この後、居酒屋行くんだけどかおりさ
んも来る？」

○居酒屋外観 (夜)

住宅街の中にポツンとある居酒屋

○同・中

カウンターがあり、畳のテーブル席がある。かおり達がテーブル席で飲んでいる。テーブルの上には空いたグラスや皿が
いっぱい置いてある。安藤と齋藤はタバコを吸っている。

かおり「ふだんは男の人ばかりなの」

齋藤「いや、女の子が入ることもあるよ。」

今回みたいにスカウトして来たり友達

連れて来たり」

かおり「動画アップ楽しみ」

安藤「編集に時間かかるからな」

かおり「次も出演したい」

安藤「かおりちゃん、演技うまいからな。」

次はちよつとセクシー系でもいい？」

佐久間「清純なのでいいでしょ」

かおり「前に出演した子たちは？」

杉原「ちよつとお色気出してつてのもあった

ね」

斎藤「あったなあ。あの子どうしてるかな」

安藤「また呼んでみようか。女の子2人出して」

佐久間「コメディ路線でいきましょうよ」

安藤「お前らが面白いセリフ考えてくれればな」

佐久間が隣に座っているかおりの耳元で話しかける。

佐久間「安藤さん、仕事何してるのか謎だわ」

かおり「シナリオライターじゃないの」

佐久間「いや、趣味みたいなものでしょ」

かおり「趣味？稼げるんじゃない」

佐久間「バズったらね。そう簡単にはいかない」

かおり「ギャラは？」

佐久間「アップした後で払うって」

○居酒屋・外（夜）

かおりと男達が出てくる。酔っぱらった

様子。かおりは佐久間と一緒に歩いている。

かおり「風が涼しい」

佐久間「夏は夜がいいね」

安藤がかおりの横に来る。

安藤「いい体してるね」

安藤はかおりの腰に手を回す。

かおり「な、な、何ですか」

斎藤「いいから、いいから」

斎藤がかおりの後ろから抱きつく。

佐久間は斎藤を突き飛ばす。斎藤は

倒れて頭をぶつける。

斎藤「いってえ」

佐久間「やめろっ」

安藤「杉原、やっつけろ」

杉原は佐久間に殴りかかるうとするが

佐久間に殴り返される。

佐久間「お前ら、そんなつもりで」

佐久間は近くに落ちていた木の棒を掴

み安藤と斎藤を威嚇する。

佐久間「どけ！」

2人はかおりから離れる。

佐久間「かおりちゃん、逃げて」

走り去るかおり。佐久間も後から駆け出す。

○交差点（夜）

釣り竿をかついだ佐竹が立っている。

脛をさすっている。信号が赤になり

ベンツが佐竹の前で止まる。窓が開く。

サングラスをかけた石田が運転席に座

っている。石田はサングラスを外す。

石田「あれ、佐竹君。何やってんの」

佐竹「ああ、見ての通り釣りの帰りです。店

長、ベンツ買ったんですか」

助手席から鈴木が顔を出す。

鈴木「佐竹君？」

佐竹「あ、どうも。ごぶさたしてます」

鈴木「君、ユーバーイーツやってるって聞いたけど」

佐竹「今は休んでます」

鈴木「たいへんじゃない」

佐竹「まあ、なんとか」

鈴木「足は？」

佐竹「ちよつと怪我しちゃって」

鈴木「よかったらさ、また居酒屋で働かない？」

佐竹「どこか紹介してもらえますか」

鈴木「戸田駅前のジューシーって店。ちよつと遠いけど」

佐竹「働かせてもらえるんならぜひ。お願いします」

鈴木「じゃあ、その店長に話しておくわ。

そうだな。ここに電話しようだい」

鈴木は名刺を佐竹に渡す。

佐竹「ありがとうございます」

石田「じゃあね」

窓が閉まりベントスは行ってしまふ。

○ベントスの中

石田「ずいぶん親切ですね」

鈴木「彼は料理うまいから。遊ばせておくにはもったいない」

石田「佐竹君のことかかってますね」

鈴木「いずれ店長として使おうと思ってる」

○佐竹の家（夜）

かおりが入って来る。大介はキッチンのテーブルで晩酌している。

かおり「ただいま」

かおりはうつむいている。

大介「ん？どうした？」

かおりは居間に行きふすまを閉める。

かおりのすすり泣く声が聞こえる。

大介「おいおい、何かあったのか」

佐竹が帰って来る。

佐竹「俺、居酒屋に復帰できそうだよ」

大介「よかったな。おまえは」

佐竹「何かあったの？」

大介はふすまの方に顎をしゃくる。

佐竹はふすまを開ける。

佐竹「どうした？」

かおり「ほっといて」

佐竹「お前、河川敷で何か撮ってたろ」

かおり「お兄ちゃんには関係ない」

佐竹「そいつらに何かされたんじゃないの

か

かおり「なにもされてないよ」

佐竹「くだらんことばかりしてるからだ」

かおり「くだらないこと？偉そうになんなの。

私はお父さんやお兄ちゃんみたいにな

りたくないの。最後はお父さんみたいにな

なりたいの？もっとキラキラしたとこ

ろに……」

佐竹「キラキラね。表面しか見ないんだな」

かおり「バカにした言い方やめて」

佐竹「今はやりのユーチューバーにでもなる

のか。お前の生活費を出してんのは俺だ

ぞ」

かおり「だから？あんたには養育する義務があるんだから」

佐竹「法律を持ち出すのか？生意気言うなら自分で稼げ」

かおり「ふん。こんなボロ家なんか」

かおりは佐竹を押しつけて外に出ていく。

○居酒屋「ジューシー」外観（夜）

○同・中

佐竹が入って来る。

店員「いらっしやいませ」

佐竹は頭を下げる。

佐竹「店長さん、いらっしやいますか」

店員「店長！お客さん」

奥から店長が出てくる。

店長「やあ」

佐竹はお辞儀する。

店長「鈴木さんから聞いたよ。佐竹君だね」

佐竹「はい」

店長「いい腕してるそうじゃないの。期待してるよ」

佐竹「いえ、俺なんてまだまだです」

店長「またまた。厨房の人間が足りないんだ。

24時間営業なんだけど、朝からできるかな」

佐久間「働かしてもらえるんならいつでも」

○木造アパート外観（朝）

○同・佐竹の家の前

佐久間が立って呼び鈴を押している。

佐久間「おはようございます」

佐竹の声「開いてるよ」

○同・中

佐久間が入って来る。佐竹がテーブルでジュースを飲んでいる。

佐久間「はじめまして。俺、佐久間といいま

す」

佐竹「かおりの友達？彼氏かな」

佐久間「お友達です。お兄さんですか。かおりさんは？」

佐竹「奥にいる。かおり、お客さんだぞ」

返事がない。佐竹はふすまを開ける。

かおりが机に向かって座っているが

こちらに背を向ける。

佐竹「ずっとこうなんだよ」

佐久間「具合悪いんですか」

佐竹「かおり、こっち見ろ」

佐久間「ちよつと心配で様子を見に来たんです」

佐竹「すねてるだけだよ。じきに元に戻る」

佐久間「かおりさん、この前はごめんなさい」

かおり「佐久間さんは悪くない」

佐久間「いや、ゴロツキばかりで。誘って

ごめん」

かおり「助けてくれてありがとう。助かったよ」

佐久間「よかったら飯でも食べに行かな

い？」

かおり「今はちよつと。今度行こう」

かおりは振り向いて微笑む。

佐久間「じゃあ約束な。(佐竹に)顔見れ

てよかったです」

佐竹「いつでも連絡して。かおりのライン知

ってるだろ」

佐久間「はい。また来ます」

佐久間は嬉しそうに出ていく。

佐竹「かおり」

かおり「なに？」

佐竹「高校卒業認定試験受けないか。大学は

行くだろ」

かおり「お金は大丈夫？」

佐竹「国立ならな。俺の収入でなんとかなる」

大介が帰って来る。

大介「ただいま」

かおり「私、女優になりたいんだけど」

佐竹「また、夢みたいなことを」

大介「何になるにしても、大学行って教養

付けた方がいいんじゃないの」

佐竹「そうだよ。お前、勉強はできるんだからもったいない」

○居酒屋ジュシー外観（夜）

「104」と書かれた看板。

○同・店内

佐竹が厨房で働いている。汗まみれ。

中年の料理人が隣に来る。

料理人「疲れたか？」

佐竹「いえ、久しぶりなんで。すぐ慣れます」

店の入口から大介が入って来る。

佐竹「いらっしやいませ。父さん？」

大介「パチ屋の帰りだよ。ビールでも飲もうかと」

佐竹「ここ、どうぞ。今日はどうだった」

大介「とんとんかな」

○木造アパート前（朝）

佐竹が自転車に乗ろうとしている。かおりが階段を降りてくる。

かおり「図書館まで送って」

佐竹「図書館で勉強するのか」

かおり「うん。お兄ちゃん、朝から仕事？」

佐竹「24時間営業だからな」

かおり「たいへんだね」

佐竹「おまえも。あと4か月だろ。お互いが
んばらないとな」

かおりは佐竹の後ろにまたがる。大介もドアから出てくる。

大介「ずいぶん早いな」

佐竹「ああ。初出勤だからね。やる気みせないと」

大介「気をつけてな」

佐竹「うん。かおり、しっかり捕まって」

かおりは佐竹の背中につかまる。佐竹はペダルをこぎだす。晴れ渡る空。セミが鳴いている。